
BAD ENDから始まるストーリー

あいあむウィーゼル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

B A D E N D から始まるストーリー

【Nコード】

N 9 0 3 3 X

【作者名】

あいあむウィーゼル

【あらすじ】

あの日、1人の少年は壊れる。そして運命が始まった。狂気を孕んだその瞳は、果たして何を映す？ これは風峰千春が織りなすある1つの物語……。

プロローグ：反転する世界（前書き）

と言っわけで、始まります。

ggggかもしれないが、お楽しみください。

プロローグ：反転する世界

愛する事は罪ですか。

愛される事は罪ですか？

愛したいと請う事は罪ですか？

愛されたいと請う事は罪ですか？

僕はずっと、愛されたかった。

愛し、愛され、それが幸せに繋がる。

だから、僕が家族を愛すれば、家族もきっと僕を愛してくれる。

でも違った。愛なんて、最初から幻想に過ぎなかった。

……それを僕はあの日、身を以て思い知る事になる。

赤い世界に佇む、織斑千冬。せかいさいきふ そんな彼女の手には、赤いナニカで濡れた剣が握られている。

その足下には、力なく横たわる亡骸が。

「大丈夫か、千春」

そう言つて、僕に近づいてくる。

大好きな姉。助けてと、何度も呼び続けた。

助けに来てくれた。でも、違う。

『大丈夫かい？』

屈託のない笑顔を浮かべていたその顔は、どこにも無い。

光に溢れていたその瞳に光が灯る事は、もう無い。

目の前の存在によつて、失われた。

「千春？ どうしたんだ？」

1歩1歩近づいてくるそいつが、とてつもなく恐ろしいナニカに思えて、1歩後ずさる。

とても愛おしいはずの存在からは、おぞましいものしか感じない。

吐き気がする。キモチワルイ。

震えが止まらない。

そいつが手を伸ばす。

「ひっ……………」

殺される。

助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて
助けて助けて助けて

助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて
助けて助けて助けて

助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて
助けて助けて助けて

助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて
助けて助けて助けて

助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて
助けて助けて助けて

助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて
助けて助けて助けて

助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて
助けて助けて助けて

助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて
助けて助けて助けて

助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて
助けて助けて助けて

助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて
助けて助けて助けて

助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて
助けて助けて助けて

助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて
助けて助けて助けて

助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて
助けて助けて助けて

「アアアアアアアアアアアアアッ！！！」

その日、僕の世界は壊れた。

「…………随分と、軽率な真似をしたものね」

病院へと現れた同僚の第一声はそれだった。

私の身が、いつもよりも数倍冷たい視線に晒される。

「あの子はまだ12歳。そんな子供の前で人を斬り殺すなんて……」

…………確かに、軽率だった。

一夏の側に千春はいなかった。

他の誘拐犯から聞き出した情報によると、別の場所へ連れて行かれたという。

その場所へと向かい、千春に襲いかかろうとしていた男を目の当たりにし、つい…………。

「無用な殺人まで犯してしまった、というわけね」

「……………どういう意味だ」

「調査結果によると、あなたの斬り殺した男性は、誘拐とは何ら関わりの無い一般人だったらしいわ」

「バカな……………何故一般人があんな場所にいる！」

「何故って、それは分からないわよ。……………ただ、もしもだけど、たまたま誘拐の現場に遭遇した正義感の強い人が、そのまま放っておけずに突入した……………というのも考えられるわよね？」

「そう言われ、確かにそうだと納得する……………して、しまう。」

「そうだ。千春は「やめて」と言っていた。あれは、そういう事だったのか？」

「だとしたら、私は何と言う事を……………！」

「どうするつもり？ 多分、ドイツ軍は今回の事件をもみ消すわよ？」

「後始末はドイツ軍が行っている。誘拐はもちろん、殺人も。」

誘拐事件が奴らの自作自演である可能性も否定出来ないが、それでも今どうこう言う事は出来ない。

「……………今、私がいなくなるわけには行かない」

そうならば、一夏と千春だけになってしまう。

誘拐事件があつた直後だ。2人だけにするのは危険だ。何が起こるか……………分からない。

昨日の今日という言葉があるように、また何か起こる可能性も無いとは言えない。

さらに私の責任とはいえ、千春があんな状態では放っておくわけにはいかない。今、私がいなくなるわけには……………。

「つまり、もみ消しを容認すると?」

「仕方ないだろうに……………!」

そう答えた私に、彼女はあからさまにため息を吐く。

失望した、と言わんばかりに。

「…………まあ、あなたの選択だから。私が口出しする筋合いはないし」

奴はそう肩を竦め、去って行く。

…………相も変わらず、掴み切れん奴だ。

「1つだけ、忠告。きちんと向き合わないと、いずれ後悔する事になるかもよ?」

それだけ言い残し、奴は去って行った。

分かっている。私は罪を犯した。これは私が償わなければならない。

だが、この時の私は分かっていなかった。奴が「向き合う」べきだと言ったのはその事では無く、全く違ったものである事に。

そして私は、選択を誤った事を深く後悔し続ける事となる……………。

プロローグ：反転する世界（後書き）

ほとんどプロットも無いまま、始まりました。

「BAD ENDから始まるストーリー」。その3つ目のルート「縁切りルート」。

ネタ倉庫に投稿したものと同じ流れになりますが、いくつか変更点があります。……まあ、タグと本文を読んでもらえば、何となく分かるかもしれませんが。

千春が歪んでいくのは、何も事件の所為だけではありません。

何故、歪んでしまうのか。それをさらに強める方法を考えて、弄ってみました。

少しの間は誘拐事件以後の千春とそれを取り巻く環境について進めていくつもりです。

第1話：終わる始まり、始まる終わり

〔Side Chiharu〕

意識が覚醒すると、目の前に飛び込んで来たのは見知らぬ部屋だった。

……うん、こういう場合言すべき言葉はきっとアレだ。

「…………知らない天井だ」

天井となっている台詞を呟き、身体を起こす。

身体に痛みは無い。特に怪我をしているわけではないので当たり前かもしれない。

周囲を見渡す。と、アルコール消毒液特有のツンとした臭いが鼻を刺す。…………うーん、どうやらここは病院か、それに値する場所らしい。

はて、何でこんなところに…………。

「……………あ」

突然、頭の中にあの時の光景が蘇った。

赤い世界の中心に立つ、おぞましいモノ。

それが私へと近づき、そのまま手を伸ばして…………。

「しっかりなさい」

「ッ!？」

肩を強く叩かれると共に呼びかけられ、ハツとなる。

今、何を…………それに、今の光景はいつたい…………。

「気がついた？」

ホツとしたような表情を浮かべている女性。

青よりも薄い藍色に近い髪。腰まで長く垂らした髪は透明度が高く、部屋の明かりでキラキラと輝いている。

「……………理音、さん」

風峰理音さん。お姉ちゃんの同僚で、今回のモンド・グロッソには

日本代表のチームメイトとして参戦している。とは言っても、整備班の人間としてだけだ。

あの、理音さん。僕、どうしてここに……それに、何が？

「あなたが一夏君共々誘拐されたのは覚えてる？」

「誘、拐」

そう言われ、ようやく思い出した。

あの日、決勝の応援に行こうとして、会場へと向かう途中でいきなり車に連れ込まれた。b僕も一夏も抵抗したけど、布を顔に当てられたら意識が遠くなって……。

『君、大丈夫かい？』

……そうだ。どこかの倉庫で意識を取り戻すと、僕が縛られた口――プを解こうとしている男の人がいたんだ。

よく分からないけど、近くに誘拐犯らしき人が倒れていたから、その人が僕を助けようとしてくれてたんだと思う。それで……。

『千春から離れろおおおおお！――！』

「ッ!」

赤い世界の中心に立つ、おねえちゃん世界最強。

そして、足下にはあの人が倒れていて…………。

「…………理音さん、僕と一緒にいた男の人は、どうなったんですか？」

理音さんにその問いを投げかけた。

…………その答えがどんなものであるか、分かっているから敢えて。

案の定、問いかけられた理音さんは答えづらそうな顔をしている。
どう考えても、子供に聞かせる話じゃないもの。

少し迷ったようだったけど、理音さんは黙ったまま首を横に振った。

「そう、ですか」

…………どうして、お姉ちゃん。「やめて」って言ったのに。

どうして…………いつも、何も聞いてくれないの？

ぎゅっと、シーツの端を握りしめる。

「…………それと、こんな事は子供のあなたに聞かせるべきでは無いのかもしれないけど……………」

「なんですか？」

「今回の事件について、今後一切口外する事が禁止されるわ」

……………
「どういう、事ですか。」

「簡単に言えば、揉み消しよ。誘拐なんて無かった。殺人なんて無かった。織斑千冬が決勝戦を放棄したのは個人の事情だ。……………そんなわけ」

つまり、全部「無かった」事になる。

僕たちが誘拐された事も、お姉ちゃんが無関係の人を殺した事も、全部。

だから、あの人が殺された事も全部、無意味だった事になってしま
う。

「後始末をしてるドイツ軍がそーゆー姿勢なのよ。私達がどうこう言っても無駄って事ね」

「そんな！…………お姉ちゃんはお姉ちゃんがそんな事許すはずが！」

「黙認するってさ」

理音さんの言葉に、僕は凍り付いた。

「私が効いてみたけど、『仕方ない』って」

「…………嘘」

「ま、今その事が公表されたら、あなた達とは一緒にいらなくなるからね。誘拐事件があつて、家族を放っておけるほど冷血漢じゃないって事でしょ」

…………嘘だと、思いたかった。

どこまでも真っ直ぐで、どこまでも厳しく、どこまでも強い。

そんなお姉ちゃんが、僕の誇りだった。お姉ちゃんが、僕の目標だった。

「嘘だッ！！」

そう叫んでも、現実是不変。

僕の中にあつた世界が、音を立てて崩れていく。

違う、あの時もう壊れていたんだ。お姉ちゃんが刃を振るつたその時から、僕の世界はもう……………。

「千春……………」

「嘘だ、嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ……………嘘だッ!!」

[Side Out]

[Side Rinon]

混乱する千春に半ば追い出される形で、私は病室を後にする。

あの様子だと、落ち着くまでしばらくかかるかな？

「…………ふふ」

思わず、口の端が歪んでしまう。

こうまで私が書いた筋書通りに進んだのだから、笑わずにはいられない。

「ほんと、バカばかり」

単純で、すぐ騙される。

千春はそこも含めて愛おいしいけど、他は憎らしいほどに愚かしい。

嘘は吐いていない。千冬は千春を守るために行動したわけだし、あの男だって千春を助けようとして、不幸な事故で殺されただけ。

……………だけど千冬は、最後のチャンスすらも自分で手放した。

（本当に、バカな女）

千春の中にあつた最後の砦を、事も在るうに自分で壊したのだから。本当なら、もう少し時間をかけて懐柔していくつもりだったけど、誘拐事件が起きたのはある意味幸運だった。

おかげで数年規模のプランを大幅に前倒しする事が出来た。

下手に行動すれば、異常なほど人間離れした千冬に感づかれる。

けど、今回の誘拐は完全に私とは無関係。おまけに結果は私にとって最高の形に終わってくれた。

本来、1年後に千冬を最強の座から引き摺り下ろすつもりだった。今までにも機会が無かったわけじゃないけど、下手に彼女を倒せば、その裏に繋がっているかもしれない篠ノ之博士に興味を持たれてしまつかもしない。

彼女がどんな情報網を構築しているかは分からないけど、私の事を感づかれる可能性はある。………少なくとも今、彼女から注意を向けられるわけにはいかない。

要はタイミング。どんな状態、どんな場面で千冬を倒せば、私にとってベストなのか。

（もうすぐ、もうすぐ手に入る）

初めてあの子に会ったのは、3年前。

たまたま千冬の家に行った時、あの子が出迎えてくれた。

その時、私は心奪われた。何歳も年下のあの子供に。とてもとてもきれいなあの子に。

その後も度々、織斑家を訪れる機会があり、千春とも言葉を交わすようになった。その都度、家族と上手く行っていない事を相談されたりもした。

……その度に、私はあの子が欲しいと思った。

うちの母親がよくギャルゲーの話をしていたけど、そっちには何の興味も無い私にとってどうでもよかった。でも、千春を少しずつ懐柔していく時、お姉ちゃんの言っていた事が身に染みて行った。

『段階を踏む事が大事なんですよ。数段飛びで攻略しようとしても、絶対うまくいかないんですよね』

お義兄ちゃんに飽きられつつも、そう言っていた馬鹿姉。

3年かけて、あの子の信頼を得る事が出来た。

「あと少し」

あと少しで、あの子は私のものになる。

そうすれば本当のプランを実行に移す事が出来るようになる。

積みもり積みもった憎悪が、一気に噴き出る様というのはいつ見ても爽快なもの。愛する家族から完全に拒絶され、憎悪を向けられたら、あの澄ました顔はどう歪むのかな？

[Side Out]

[Side Chiharu]

翌日、お姉ちゃんが病室にやってきた。

……………どうしてだろう。すごく好きだったのに、今のお姉ちゃん

からは嫌な感じしかない。

僕を心配しているであろうその表情も、すごく……嫌な感じがする。

おざなりに返事をしつつ、1番気になっていた事を聞いてみる事にした。

「……………ねえ、お姉ちゃん」

「なんだ？」

「ドイツ軍があ的事件の事、もみ消すって本当？」

お姉ちゃんの目が一瞬だけ止まる。

子供の僕に正直に答えていいのか、それを考えたんだろう。

少し迷ったみたいだけど、お姉ちゃんが口を開く。

「ああ。その方が向こうにとって都合がいいらしい」

「……………お姉ちゃんがあの人を斬り殺した事も？」

その瞬間、病室の中が凍り付いた。

まさかとは思うけど、僕が知ってるとは思ってなかったとか？ もしくは、そんな事聞いてくるとは思ってたとか？

そんなお姉ちゃんの考えに、少しだけ腹が立った。

「僕、やめてって言ったよね？ でもお姉ちゃんは聞いてくれなかった」

「千春、それは」

「勝手に勘違いして、人を殺した事も全部『無かった』事になるんでしょ？ 違う？」

そう強い口調で問い詰めると、暗い表情で短く「そうだ」と応えた。

それが軍の決定なら、お姉ちゃんや僕が何かを言っただって、それは簡単には覆らない。でも、1番許せないのはそこじゃない。

「お姉ちゃんはそれを認めたんでしょ？ その人を殺した事も『仕方ない』って」

「！ 何故、それを……………」

そう呟いたお姉ちゃんだったけど、すぐに誰が僕にそれを教えたのか思い当たったらしく、表情に怒りが浮かび始める。

でも、それは見当違いの怒り。だって隠してたって、いずれは僕の耳にも入るだろうし、それが遅いか早いかだけの話。

「どうして、あの人を斬ったの？」

そう質問しても、お姉ちゃんは答えない。

ああ、ダメだ。どんどんイライラが積もっていく。もう止まらない。

「あの人は僕を助けてくれたんだよ？　なのに、どうして斬ったの？」

「……………あの男が、お前を誘拐したと思ったからだ」

「……………そう」

ぎゅっとシーツを握りしめ、真っ直ぐにお姉ちゃんを射抜く。

お姉ちゃんは僕と視線が合い、怯えたように1歩後ずさる。

……………本気で怒るのって、初めてかもしれない。これまでは怒りたくても怒れなかったから。

「……………お姉ちゃんはいつもそうだ。僕の事なんて見てないし、僕の言った事なんて聞いてくれない」

いつも、一夏の事ばかり優先してる。

「違う！ 私は」

「ならどうして、やめてって言ったのに聞いてくれなかったのッ！」

反論出来ず、黙り込む姿を見て、心の中にあつた最後の何かが砕けた。

もうこの人は、私のお姉ちゃんじゃない。お姉ちゃんなんかじゃない。

「……………出てって」

喉の奥から搾り出したその言葉に、目の前にいる人が顔を上げた。

イライラする。この人がここにいるだけで不愉快だ。

「ち、ちは」

「出てって！ もう僕の前に現れないで！！ 出てってよ！！」

第2話：あの人達は今（前書き）

まあ、過去編は後2話ほど続く予定です。

千春が何を考え、何を決意するのか。

今回は、お馴染みのあの人達も登場します。あくまでサブですけども。

第2話：あの人達は今

完全に千春に拒絶され、私は力なく病室を後にした。

……確かにそうだ。私はずっと、千春の事を気にかけてた事は無かった。

愛していなかった、というわけじゃない。ただ、千春は一夏と比べて、人並みに何でも出来る器用な子だった。

だから、何かと手のかかる一夏を優先してしまった。

「私は、バカだ」

千春なら大丈夫だ。

そう思い込み、あの子の事を気にもかけず、ただ自分のやりたいようにやってきた。

それが弟達を守るための道なんだと、そう信じて。

……それが、この結果だ。

「あらあら、本当に無様なこと」

聞こえたその声に、反射的に顔を向ける。

そこには、いつもと変わらぬ笑みを浮かべた風峰の姿があった。

「今まで勝手にしてきたツケが回ってきたって事ね」

「貴様……………！」

思わず、風峰に掴み掛かる。

揉み消しについて『仕方ない』と言ったのは、こいつの前でだけだ。
なら、千春にその事を喋ったのは……………！

「ええ、私が話したわ。事件の事もぜんぶ」

「何故そんな余計な事をした……！」

「あなたが話したら、絶対に都合の悪い事は話さないでしょ？ あの子は当事者だし、全部を知る権利はあるもの」

「屁理屈を……………！」

だが、千春はまだ子供だ。もう少し話し方というものがあるだろうに……………！

「その子供の前で人を斬り殺したあなたに言われたくないけど？」

掴み掛かっていた腕に風峰の手が添えられたかと思うと、一瞬で私の視界が反転し、地面に正面から強く叩き付けられた。

「あら？　簡単にあしらわれたのがそんなに不思議？」

「貴様、実力を隠していたのか………！」

これまで、風峰の実力を目にする機会があつた。

ハッキリ言つてパツとせず、せいぜい中の上程度。今回も整備の間として同行したに過ぎない。

しかし、実力を隠していただと？　何のために？

「他人に手札を晒すほど、私はバカじゃないもの」

私の腰の辺りにすつと指が添えられる。

立ち上がろうとするが、いくら力を入れても立ち上がれない。

「知ってた？　私、あなたみたいなタイプが大嫌いなもの」

笑顔を崩さないまま、そうやってのける風峰。

そのまま私の耳元へと口を近づけ、そつと囁く。

「……………だから、あの子は私がもらっわ」

「ッ!」

まさか、そのために……………そのために!

「逆恨みしないですよ? あの子があなた達と疎外感を感じてたのは前々からだし、私はその都度アドバイスしてただけ」

「千春に在る事無い事吹き込んでか……………?」

「だから、逆恨みはやめてくれる? 別に嘘を吐いたりは(ほとんど)してないわよ?」

そんな事を言い放ち、風峰はそのまま私からの手を離し、病室の扉へ手をかける。

「あなたは最後のチャンスすらも自分で捨てたんだもの」

「すみません、あの人がご迷惑を」

「いいのよ」

どうやら、千春はほとんど聞いていたらしく、病室に入った瞬間頭を下げられた。

まあ、部屋の前であんな事話してたら、普通聞こえるわよね。

さてと、うまく本題を切り出す事にしよう。

「ねえ、千春は……………日本に戻ったらどうする?」

「どうすると言つと?」

「正直言つて、千冬達と一緒に暮らせる?」

そう尋ねると、千春の表情が曇った。

これはちよつと意地悪な質問だったかな? だって答えは分かり切つてゐる。

「……………無理です。あの人の事、もう受け入れられないと思います」
「やっぱり、か」

問題なのは切り出し方。どういつ風に話を切り出すか……………。

下手に話を出すと、積み重ねてきたものが全部崩れてしまう。ここは慎重に……………。

「あの、理音さん。良かったら、どこか1人暮らしできる場所を紹介してくれませんか?」

「へ?」

「お世話になれそうな人もいませんし、子供が1人ではどこも部屋を貸してくれないでしょうし……………」

いや、いやいやいやいや、それくらいだったら私のところへ来なさいよ。

自慢じゃないけど、私はマンション（かなりいい所）に1人暮らしだし、子供が1人住まうくらいのスペースはある。

と言うより、元々誘うつもりだったからその方がありがたいし。

「理音さんの家に、ですか？」

そう伝えると、千春は少し悩んでいるようだった。

まあ、1人暮らしの女の部屋に押しかけるのは、さすがに子供とはいえ男の子なんだから抵抗はあるか。

「部屋は余ってるし、どう？」

「……………じゃあ、お願いします」

その言葉を聞いた瞬間、心の中でガッツポーズを決めた。

よし！ これで王手はかけた！ 後はじっくり楽しむだけ……………ふ

ふふ。

「あの、理音さん？」

「あ、うう、めんなさいね」

私はまあ、現役を引退してからは基本的に引きこもって仕事する事が多いんです。

元々あまり他人と話すのは好きじゃありませんし、必要最低限の相

手と話してるだけで十分なんです。

そんな私の所へ、夫がある話を持って来て、思わず吹っ飛んだ。

「理音が男の子を自分の部屋に連れ込んだ!？」

差し入れのケーキを切り分けてる最中、その話が出たので、思わずナイフを落としそうになってしまう。

その部分だけ聞いたらハッキリ言って笑えない。完全に犯罪です。まだ中学生の子らしいですし。

「それ、マジですか？」

「残念ながらマジだ」

紅茶を飲みつつ、夫がそう答える。

あの子……男に興味が無いみたいでしたが、まさかシヨタコンだったとは。

「育て方、間違えたかもしれませんね」

近いうちに1度、母親としてOHANASHIに行かなくてはな

らないかもしれません。

「それなんだがな……………」

ふと、陸斗がどことなく困った様な顔をしているのに気づいた。

何かあったんですか？

「理音の所にいる子供なんだが、織斑千春というらしい」

「……………織斑？」

珍しい名字ですし、まさかとは思いますが、織斑千冬の血縁者ですか？

「残念ながらな。弟らしい」

「何考えてるんですか、あの子は！！」

思わずダンツ、とテーブルを叩く。

寄りによって織斑千冬の弟を連れ込んだ？ アホですか？ アホな
んですね！？

「やっぱりあの子、まだ諦めて無かったんですね……………」

薄々感づいてはいましたが、あの子の心の闇はまだ消えていない。

だからこそ、織斑千冬の弟を引き込んだ？ 自分の道具にするために。復讐のための道具にするために。

「いや、どうやら本気で惚れてるようだった。少なくとも使い潰すという感は無かったな」

切り分けたケーキを口に運びつつ、陸斗がそう呟く。

ふむ……………陸斗の観察眼は本物ですし、そう思うならそうなのかもしれないね。

「だが、憎しみは消えてないだろう」

「……………やっぱり、ですか」

あの子の中にある憎しみは、そう簡単には消えない。

インフィニット・ストラトス……………ISの誕生によって、世界は大きく歪んだ。女尊男卑の世界へと。

そんな世界の変革のうねりに巻き込まれ、人生その物を歪まされた人間も決して少なくはない。……………理音もその1人。

「ところでその千春という子、どんな子でした？」

「ん？ そうだな……………ちょっと喋っただけだったが、いい感じの子だったぞ」

じゃあ、純粹に理音の好意に甘えて、という事でしょうね。

……………氣の毒に。

陸斗も全く同じ事を思ったのか、渋い顔をしており、私と顔を見合わせて深くため息を吐いた。

「その子、そう遠くない内に食われますね」

「……………ああ」

理音はこれまで、異性に対して愛情を示す事は無かった。

恐らく、あの子の中にはこれまでたまり溜まった愛が、放出されるのを今か今かと待ち望んでいる。

それがどういった形で放出されるかは分からない。けど、私がそうだったように、決して真つ当な形で放出されるとは……………限らない。

（お願いですから理音、絶対に犯罪だけはしないでください！！）

無駄かもしれない事を、遠く離れた空の下にいるであろう娘に対して祈った。

「り、理音さんダメです！ そんなとこ触っちゃ……………」

「あら、ここがいいのかしら？」

「ひゃっ！？……………そ、そこは……………」

「ふふふ……………可愛いんだから」

第3話：そして運命が始まる【前編】（前書き）

前後編です。ようやく玖楼の運命の歯車が回り始めます。
ただし、それが正しい回り方をするのかは……。

第3話：そして運命が始まる【前編】

……そう、全ての始まりはこの日だった。

理音さんの誘いを受けて、僕はIS業界においては日本でも有数の研究機関『倉持技研』へとやって来た。

世界的に主流なのは『ラファール・リヴァイヴ』や『打鉄』と言った第2世代の機種。そして倉持技研では現在、特殊装備を搭載する事が前提となる第3世代機の開発が行われている。

「これが第3世代機……」

「そう。日本初の第3世代機種。その名も『帳姫』！」
とほひめ

僕の前に鎮座しているのは、真っ白なIS。

まだ完成していないので、ところどころパーツが欠けている。これだと完成には大分かかりそう。

これって、理音さんが乗る事になるんですね？

「ええ。私の初めての専用機になる予定よ」

どこの国も第3世代の開発に乗り出してるって話だし、次のモンド・

グロツソは第3世代の機体が乱舞する事になりそう。

……… あ、ここで思い出した。織斑千冬……… 僕のお姉ちゃんだった人の事だけど、結局あの人は日本に帰ってきてすぐドイツへと旅立った。

あの誘拐事件の後始末をしたドイツ軍から、あの人に教官としての就任要請が来たため。そんな名目で、あの人は日本に帰ってきてから僕と一言も口を利く事なく、顔を合わせる事すらせずにドイツへと旅立った。

ま、今はドイツの軍人をシゴいてるんじゃないの？

「理論は出来てるんだけど、それをうまく実現してくれる人がいないのよね」

はあ、とため息を吐く理音さん。

理論ばかりが先行しすぎて、技術がそれに追いついていないって状況みたい。

僕も力になりたいけど……… そーゆーのって専門外だし、ハッキリ言って分からない。

……… 実を言うと、あの人は何だか僕たちを極力ISに関わらせないようにしてたみたいだから、ISに関する知識もそこまで持っていない。せいぜいニュースや雑誌で見る程度かな。

「…………あれ、こっちは何ですか？」

ふと、視線をずらすと見慣れないものが視界に飛び込んできた。

形状こそ、第2世代機の『打鉄』に似ているけど、細部が異なる。装甲の形が異なっていたり、ブースターが大型だったり、色が水色だったりと。

「それ？ データ収集用の打鉄よ。私用にちょっとカスタムしてあるけど」

「へ……………」

代表候補生が登場する機体だし、やっぱり既存のままじゃ対応仕切れないのかもしれない。

よくガン。ムとかでも、パイロットの能力が高すぎて、並の量産機じゃ追従出来ないとか言うし。

打鉄の後継機もこんな風にカスタムした機体から生まれるのかな。そんな事を思いつつ、何気なくカスタム打鉄（仮）へと手を伸ばす。

……………その時、カスタム打鉄に触れずにいたら、僕のこの先の運命は大分違ったものになっていたのかもしれない。

「ッ!？」

カスタム打鉄の装甲に触れた瞬間、まるで雷に打たれたかのように鋭い何かが脳を駆け巡った。

痛みじゃない、これは情報。脳へとダイレクトに膨大な情報が流れ込んできた。

倒れそうになるけど、どうにか踏ん張って膝を突く程度で済んだ。

「千春!？」

理音さんが僕を抱きかかえるが、彼女の表情は別の物へと釘付けになった。

たった今、僕が起動させたばかりのカスタム打鉄へと。

「ISが……………起動した？」

よく分からないけど、周辺の機器が何か激しく点灯したりしている。

多分、僕がカスタム打鉄に触れた事でそれを起動させてしまった事を意味しているんだろう。

……………だけどこの時の僕は、あまりにも多くの情報を送り込まれた

事で意識が朦朧としていたので、いったい何が起きたのかを正しく理解出来ていなかった。

そつ、世界初の男性IS操縦者が生まれた事を……………。

理音から知らせを受け、玲夜共々すぐさま倉持技研へとやって来た。すぐに理音が手を打つたらしく、職員の大半は何が起きたかは知らない。だが、側にいた人間までは誤魔化しきれない。

俺たちが到着すると、理音を始め、現場に居合わせた職員が待って

いた。

「…………お父さん」

「話は聞いてる。千春君は？」

「医務室で検査中。情報酔いしたみたい」

これまでISを動かせたのは女だけだったし、男が動かしてどんな影響が出るかは分からない。

多分、単に多くの情報量を送り込まれた事による、一時的なショックだと思うが…………。

「でも、どうして千春が…………」

「…………その事について、少し調べた事がある」

理音には黙っていたが、実は千春君が理音の部屋に転がり込んでから、彼について調べさせてもらった。

家族構成は織斑千冬、一夏の3人姉弟。両親は彼がまだ物心つく前に蒸発したらしく、現在の所在は一切不明となっている。

……………そこまでしか分からなかった。そう、そこまでしか調べられなかったのだ。

彼の両親が何故、幼い子供達を残して蒸発したのか。

彼らには親族が全くない。それどころか、織斑家がどこから来たのかすら分からなかった。

織斑家には謎が多い。彼がISを動かさせた事も……もしかしたら、その謎に関係あるのかもしれないな。

「これから、千春はどうなるの？」

「俺から上の人間には話を通しておく。話の分かる相手だから、無茶な命令が下りたりする事は無い」

とにかく、今回の事は絶対に秘匿しろ。

もしも情報が漏れてもしたら、最悪の場合、あの子はホルマリン漬けにされるかもしれない。

「……………うん」

……………そりゃあ、ショックだろうな。

やっと望んでいたものが手に入ったと思っていた矢先に、こんな大騒動に巻き込まれたんだから。

だが、今1番心配なのは……………。

（逃れられないって事、なのか）

千春君はどこまで行こうと、『織斑千冬の弟』という事実は消えない。

今回、ISを動かしてしまった事で、それを再認識してしまったんじゃないか。……………思い詰めていないといいんだが。

今の世界が好きか嫌いかで言ったら、「好き」と答える男は絶対に少ないだろう。

ISの登場によって、男性の地位は底辺まで落ちて、男の威厳とか亭主関白とかそーゆー言葉は無いにも等しい状態となっている。

ISが初めて観測されたのは、今から5年前。日本に向けて2000発ものミサイルが発射された「白騎士事件」。突然現れた『白騎士』によってミサイルは撃墜され、白騎士を捕えようとした現用兵器を行動不能にし、白騎士は姿を消した。

そしてそれから、ISは注目を浴び始め、あっという間に世界中がその技術を求めた。

だけど、そこでISの最大の欠陥が……女性にしか反応しないという欠陥が判明し、そこから男性の地位は低下を始める。

学校でもそうだった。男子と女子の対立がより強くなって、酷い場合だと大多数の女子から男子への虐めだってあった。もちろん、その逆も。

……あんまり話したい事じゃないけど、僕自身も男子よりも女子に近い容姿をしているため、両方から虐めを受ける事が多々あった（その度に幼馴染の中国人の子が助けてくれたけど）。

だから、この世界が好きか嫌いかで言ったら、迷い無く僕は嫌いだと答える。

「……………」

検査を終えて、座椅子に腰掛けたままだぼうとする。

何故、男である自分にISが反応したのか。

「ブリュンヒルデ世界最強” 織斑千冬に關係している事なのかは……………分からない。

「……………」

でも1人だけ、何かを知っていそうな人がいる。

ISの生みの親であり、僕たちにとっては幼少期から付き合いのある篠ノ之束博士。

現在はISコアの製造を467個でストップし、突如行方を眩ましている。……………妹の箒ちゃんやあの人なら連絡が取れるかもしれないけど、あの人には会いたくないし、箒ちゃんも今どこにいるか分からない。

それ以前に、僕はあの人に酷く嫌われている。会いに行ったとしても絶対に会ってくれないだろうし、答えてくれるとは思えない。

「……………どうして」

一夏なら、今の僕のような状況に置かれたとしても、そこまで気に留めずに日常を過ごせるのかもしれない。

でも、僕は考えてしまう。男がISを動かせるという意味が、どういふものなのか。

世界で今なお辛酸をなめ続けている男達にとって、『世界初の男性IS操縦者』は間違いなく希望の旗印のようなものに思えるだろう。そうなれば、僕は今後どんな扱いを受けるだろうか？ 最悪、「どうすれば男がISを使えるようになるか」という研究目的の下、実験施設に送られて解剖される可能性だってあり得る。

これから先待っているかもしれない、非人道的な扱いに道具としての末路。

そう思うと、震えが止まらない。

「どうして、なの」

どうして、僕なんだろう。

ただ愛したくて、愛されたくて。誰かの「特別」になりたくて、それで頑張っ……ただそれだけなのに。

本当に欲しいと思ったものは手に入らなくて、欲しくないものばかり手に入る。

こんな「特別」になんてなりたくなかった。

「恨むよ、カミサマ」

望まない願いばかりが叶う、狂った世界。

それならこんな世界、壊れてしまえばいいのに。

「……………あ、そっか」

……………壊しちゃえばいいんだ、こんな世界。

こんな歪んだ世界、もう壊れてるんだからもう1回壊せばちょうど良くなる。

「あはっ」

その考えにたどり着き、自然と笑みがこぼれてしまう。

何で気づかなかったんだろう。こんな簡単な事に。

女尊男卑の今の世界を否定する。

完全に否定して、新しい世界を作る。弾き出された僕達が生きる事

が出来る、素晴らしい世界を。

「ははは、あはは………あははははははははは！」

快感。恍惚。享楽。陶醉。

これまで味わった事の無い感覚が、僕を支配する。

邪魔するものは全部壊してしまえばいい。

世界最強も、篠ノ之束も、白騎士も、全部全部壊してしまえばいい。

間違ってるのは僕じゃない、世界の方だ………！

第4話：そして運命が始まる【後編】

お父さん達も交えて、千春の今後について話し合っていた最中、当の本人から予想外の言葉が放たれた。

その言葉にフリーズする私を尻目に、お父さんが静かに口を開く。

「千春君、それは本気で言ってる？」

「はい。冗談でこんな事言いませんよ」

真剣な顔のお父さんとは対照的に、千春はいつも通りの変わらぬ微笑みを浮かべているけども、いつもとは違ったものに感じられる。

どこか……吹っ切れたような、全く別のものに。

それはともかくとして、千春のそれが本気だというのなら、確かに世界は変えられる。それもこれまでの歪んだ世界を完全に破壊する事が……。

「ハッキリ言って辛い道だよ。例えるなら、広大な砂漠で一粒のダイヤを探す……そんな道だ」

お父さんがそこまで危惧するのも分かる。

千春が本当にそれを行うならば、これまでの全てを捨てなくてはならなくなる。

『織斑千春』として過ごしてきた12年間を全て捨てて、全く別の自分として生きる事を選ばなくてはならない。

織斑である自分と決別するのは、千春にとってそこまで難しいものじゃないかもしれない。でも、これまで辿ってきた道の中には掛け替えのない物だって存在しているはず。織斑千春と決別するという事は、それも含めた全部を捨てなくちゃなくなる。

「ダイヤなら自分で輝くでしょ？ それに、見つからなかったら自分がダイヤになればいい。……………それだけです」

千春……………。

……………よし、決めた。

「千春、私も協力するわ」

「理音！」

「千春の道は私の道だもの。それに……………」

千春の征く道の先に、私の求める未来がある。

この子と一緒に進めば、きっと私の求めるものが手に入る。……それが1番の近道だもの。

「……上の連中にも、ちょっとばかり口を利く必要があるか」

ため息を吐きつつも、お父さんもそう呟く。

そう言えば、この人ってかなり謎な人なのよね。偉い人とコネがあるみたいだけど、どーゆー経緯で渡りを付けたとか、そもそも何の仕事をしてるとかも知らないし。

お母さんは元軍人だって聞いてるけど……あれ、そう言えばさっきから黙ってない？

「……千春さん、ハッキリ言って私は反対です」

厳しい顔のまま、お母さんがそう言い放つ。

「どうしてですか？」

「危険な道です。血反吐を吐く道になるのは目に見えていますし、そうまでして目的が達せられるかすら危うい。それにあなた自身の運命が、それだけに限定されてしまうのも事実です」

……そう、なのよね。

千春はまだ13歳。その道を選べば、自動的に将来を決定してしまうことになる。

元軍人という立場から、お母さんとしても複雑に思うところがあるのかもしれない。

「別に生半可な気持ちでこの道を選ぶわけじゃないですよ」

「と言うと？」

「誰かがやらなきゃならない。こんな歪んだ世界、誰かが壊そうと立ち上がらなきゃならない。僕が最初の1人になるんですし、充分じゃないですか」

そう言って、また嗤った。

……やっぱり、どこか今までの千春とは違う。

とてもキレイで、とても愛おしくて、とても……危うい。

「……そこまで言うなら止めません。せいぜい血反吐を吐かせてあげる事にしましょう」

これまでとは打って変わって、不敵な笑みを浮かべるお母さん。

えっと、それはつまりガチで千春を鍛えてあげる、と言っているのでしょうか？

いや、いやいやいやいや。母堂様、あれは血反吐を吐くというレベルじゃありませんよ？ どう考えても手足が千切れるレベルで……。

「何か言いましたか？」

「……………ナンデモアリマセン、ハイ」

鋭い視線を向けられ、思わずそう答えてしまう。

当の千春はきょとんとしている。事実を知ったとしても、どうか私を恨まないで！ この人だけはどうにもならないの！

千春さんと理音がいなくなってから、私は陸斗に問いかけた。

「陸斗、あの子は……………」

そう尋ねるも、陸斗は険しい表情のまま首を横に振った。

千春さんに宿ったもの。それは狂気。

分かりやすく言うと、限界を超えてしまったために、振り切ってしまったのかもしれませんが。

「ああなっ たら誰にも止められん。あの子は自分が血にまみれても目的を達成しようとするぞ」

「……………それなら、こっちである程度目を光らせつつ、うまく誘導した方が安全ですね」

狂気に染まってしまった者の末路は、決して明るくない。

私自身、そうなった人間を目の当たりにした事がありますし……………ハッキリ言って、思い出たくない結末を迎えました。

千春さんが何を思い、何を考え、どんな行動を取るのか。

あの道を選んでしまった以上、間違いなく過去の自分とは完全に決別する事になりますし、最悪家族だった人達とも敵対しなくてはならなくなる。

普通なら躊躇うでしょうけども、あの子は狂気に染まりつつある。

「変な方向に進まなければいいのですが……………」

……………なお、彼が私の想像のやや右斜め上を進む事になると気づくのは、数日後。

千春が家を出てから1ヶ月が経った。

どうやら学校の方には根回ししていたらしく、先生によると既に転校扱いになっているのだとか。

「で、そっちはどう？」

「ダメだな。やっぱり連絡取れない」

お手上げ、とばかりに肩を竦める弾。

あたしも登録してあった番号が繋がらなくなってるし………アイツ、どうしちゃったのよ。

「分かんねえよ。けど、ある意味それが自然な流れかもしれないだろ」

「……………そりゃ、そうだけど」

千春が家を出た理由。それはやっぱり、一夏や千冬さんとの不仲が考えられる。

決して険悪というわけでは無かったけど、千春と心を通わせていたかと聞かれると、頷くことは出来ない。

だって、一夏の口から千春の話題が出た事なんて、これまで1度も無かったもの。

アイツらが千冬さんの応援に海外へ行つて、それで戻つて来たかと思つと、今度は千冬さんがドイツへ行つて、それから間もなく千春が家を出て行つた。

……普通に考えて、向こうで何かあつたと見ていい。

だって、あの家族大好き人間が、これまで何があろうとも家族第一に考えてたお人よしが出たのよ？ 何かあつたって思つてもおかしくない。

「蘭には何か来てないの？ あたしら以外で千春と仲良かったのつて、蘭ぐらいだし」

「さあな。少なくとも何も聞いてないが……」

五反田蘭は、弾の1歳年下の妹。

あたしら以外で千春と仲良くしてた奴つて言つたらあの子ぐらいしか思いつかない。

蘭にも何の連絡も無いって事は……これ、かなりマジなのかも。

「一夏も何も話してくれないし」

どうも千春が出て行く際、相当キツイ事を言われたらしく、一夏は最近元気が無い。

……まあ、あたしから言わせてもらうなら今更だと思うけど。

これまで散々、千春の事を気になかなかつたくせに、ちょっと言われたくらいで落ち込むってどんな神経してるのよ。

あたしは旅行先で何があったか知らないけど、千春がキレるぐらいだから、桁外れにバカな事したんじゃないの？

「……………ほんと、アイツどこ行っちゃったのよ」

—— 3年後

空港のロビーに、1人の少女の姿があった。

白いスーツに袖を通した、15歳前後の少女。

色素を抜いてしまったのか、その髪は茶色よりも金髪にやや近く、そんな髪を腰の辺りまで垂らしている。

「大丈夫だって。こっちの通知はもう届いてるんだから」

『――』

「忘れたの？ 私、推薦取ってるんだって。……うん、それじゃまた」

そう言って通話を切り、鞆の中へと放り込む。

そのままうーん、と屈伸する。と、そんな時だった。

「千影さーん！ 風峰千影さーん！ どこですかー？」

「おっと………ここですー！」

自分と呼ぶ声が聞こえ、簡単に身なりを整える。

髪の乱れ……無し。服……大丈夫。靴……問題無し。荷物………持ってる。

と、そこへ駆け寄って来たのは緑髪の女性。スーツ姿だが、女性としては立派すぎる代物が自己主張しており、男性はもちろんの事、同性からも羨望の目差しを浴びている。

「えっと、風峰千影さん……ですよね。IS学園教諭、山田真耶です」

「わざわざすみません。出迎えなんて……」

「いえ、これも仕事ですから！」

千影はここ数日、ちょっとした用事で外国にいたのだが、帰国の際にIS学園から迎えの者を出すという連絡を受けていた。

出迎えなんていい、と断ったのだが、向こうも頑として譲らなかった。

「それに風峰さんは無頓着過ぎます！　これまで何度も狙われたって聞いていますよ？」

「あ、あはは……」

IS学園がこの様に迎えを出すのにも理由がある。

千影はこれまで、数回の襲撃を受けている。幸運にもその都度、家族が側にいたため傷一つ負う事なく済んでいるのだが。

今回の出立も数人の護衛が側にいたが、帰国の際は諸事情からそれが叶わず、已む無くIS学園から教員を迎えに出す事にしたのだ。

「別に護衛なんて必要ないんですけどね……………」

私、強いですし。

自信に満ちたその言葉に、真耶も素直に感心している。

風峰千影。日本代表候補生の中でも群を抜いて優秀だとされており、その友人でもある更識簪と並んで、次期国家代表に最も近いとされている操縦者だ。

だが、それでも彼女はまだ子供。いつ何が起こるか分からない。だからこそ大人の自分がしっかりせねば……………！

心の中で、真耶は静かにそう決意していた。

と、千影が思い出したように真耶に対して口を開く。

「そう言えば、IS学園にはかのブリュンヒルデ……………織斑千冬さんが教員として在籍していると聞いていますか？」

3年前、ドイツ軍に教官として赴任し、1年間の海外生活から帰国した織斑千冬は突如、現役から引退。

その後の彼女はIS操縦者を養成する教育機関『IS学園』の教師として、現在も教鞭を執っている。

なお、現役から退いた今なおも、IS業界からは彼女を慕う者は多く、彼女に憧れてIS操縦者を目指す、という少女も少なくはない。

「去年は………大変でしたね。織斑先生が教壇に立った瞬間、その……黄色い悲鳴が響き渡って」

どうやら、彼女を目指す少女達はミーハーな人々が多いらしい。

その光景がリアルに想像出来て、千影はふつと苦笑を浮かべる。

………昔から、その辺りは変わっていない。

「そうですか」

変わっていないなら、遠慮する必要は無い。

（盛大に喉元食いちぎってあげるよ。お姉ちゃん………）

風峰千影。かつて織斑千春と呼ばれていた少女は、とても危険な笑みを浮かべた。しょうねん

第4話：そして運命が始まる【後編】（後書き）

ようやく原作の時間軸に乗りました。

空白の3年間については、おいおい語られる事になります。

千春……もとい、千影の物語がようやく始まります。

休止のお知らせ

感想で指摘された通り、良かれと思って設定を編み込んだ事が、逆に面白みを無くしてしまったようです。

その辺りは私自身、領けるところがありますし、「どうしてこうしたんだろう」と自分でも想っています。

そこで一旦、更新を休止し、また新たに練り直して投稿し直す事にします。

今回の事は初めてIS物を書いた私にとっても勉強になりましたし、一応は書きたい事がありますので、またいずれ新しく書く事になると思います。

追申：しばらくは削除せず、そのまま残しておきます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9033x/>

BAD ENDから始まるストーリー

2011年11月3日23時14分発行